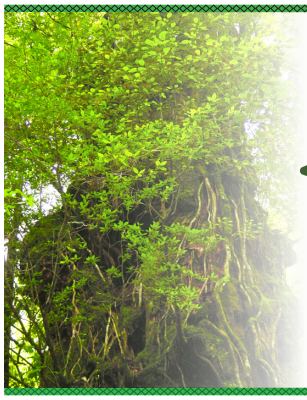


April 8, 2011
第５号

NEWSLETTER

大阪女学院大学　大阪女学院短期大学

教員養成センター

●巻頭エッセイ「教員の資質能力の向上方策（審議経過報告）」に思う 1
●教員免許状更新追加講習報告 2
●『OJC 教職活動報告・研究』の発行 3
・投稿規定 3
●授業の玉手箱　「学習意欲を高めるストラテジー」 4
●書籍紹介　『異文化トレーニング　―ボーダレス社会を生きる―［改訂版］』 4
●編集後記・第８回勉強会案内 4

巻頭エッセイ

中井　弘一

－ 中央教育審議会
「教職生活の全体を通じた 教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議経過報告）」に思う －

はじめに、東日本大震災で被災された方に心からのお見舞いを申し上げたい。失われたものの大きさに打ちのめされても、それでも「前向きに」生きていこうとしている人たちとの絆を心にしっかり刻みたい。教育の場においても、できうるかぎりの支援を行うことが求められている。まずこのことを心にとめておきたい。

さて、文部科学省は、大学４年間で必要単位を修得すれば教員免許が取得できる現行制度を変革し、正規教員として教壇に立つには教職大学院修了など修士課程レベルの免許取得を求める新制度の検討を始めた。その諮問機関、中央教育審議会の教員の資質能力向上特別部会は、教員免許について、大学の学部卒業段階では教員にはなれるが担任に就かず校務や授業を補助する暫定的な資格の「基礎免許状」、教員採用後に大学院などで学んだ者に正規教員につながる修士レベルの「一般免許状」、より高い専門性を身につけた者に「専門免許状」という3段階の免許を与える教員免許制度改革案を検討している。

政権の持続問題などもからみ、どう具現化されるかは予測できないが、去る１月 31 日に中央教育審議会が審議経過報告 を出した。紙面の都合上、上記の新免許状の実効性などについては論じないが、経過報告書「はじめに」記載の「取り組むべき課題」を国の学校教育の現状認識としてとらえ一考してみたい　。

取り上げられていた 11 項目の課題の中で、学校現場の現状認識を表すものに、

○しかしながら、今日、学校現場では、いじめ・不登校等の生徒指導上の諸課題への対応、特別支援教育の充実、外国人児童生徒への対応、ICT の活用をはじめとする様々な課題が急増するとともに、学力の向上や家庭・地域との連携協力の必要性も指摘されている。また、学校現場の多忙化や学校を取り巻く社会状況の変化により、いわゆる「学びの共同体」としての学校の機能が十分に発揮されていないとの指摘もある。

○これからは、教員自身が主体的・自発的学習者として、常に学び続ける存在であることが一層必要であり、子どもの学ぶ意欲を高めるためにも、そのような学びの場としての学校であることが求められる。このため、教員の養成や研修においても、一斉指導による学びからワークショップ型の協働的な学びや、ICT を用いた各自の習熟度に合わせた個別学習、子どもの意見を先生にフィードバックするコミュニ ケーション型の学び等をより重視する方向へと転換する必要がある。

などがある。（下線部筆者）

これらの認識から、これからの教育として、ワークショップ型の協働的の学びや、子どもの意見を先生にフィードバックするコミュニケーション型の学びが一層重視されているということがうかがえる。言い換えれば、一方向の一斉伝達方式の授業でなく、協働して学び合う生徒同士のコミュニケーションや教員と生徒とのコミュニケーションを通して学ぶ、つまり対話型（interactive）の授業が求められている。

この対話型の授業を行うには、教材を見る眼、教材の読み込み、教材に関する体系的な知識、学習プロセスに関する教育学の知識、そして個々の生徒の学習実態の理解などが必要不可欠である。生徒はクラス集団という一つの枠にあてはめることができない個別な存在である。個に応じた生徒との対話による学びのつながりを築くため教員は教材といかに対話させるか十分な事前準備をすると同時に授業において相手に応じた柔軟な対話・対応を瞬時に判断しなければならない。

生徒の思考は対話の中で生まれ、対話に内在する論理が生徒の思考力を育成する。それゆえ、ただ単に回答させるのではなく、思考が内在化するように教員が対話に支援参加することが望まれる。対話型の授業コミュニケーションは、マニュアル化してスキル育成できるものでなく、教材と授業デザインを体系化した教科内容学と統合し、実際の教育実践の場で教材を活かす質の高いやりとりの中で育成されるものである。

これからの授業や指導においては、小手先の指導技術より、理念や考え方をしっかりもって生徒に臨むことが一層重要で、それが指導への信頼につながると思う。

特　集

教員免許状更新追加講習　2010

平成 23 年 3 月 12 日（土）　　報告：中井　弘一

「コミュニケーション・ルール：その基盤となる概念を考える」

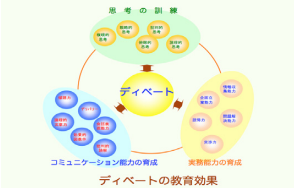
・ディベートの考え方 ―論理的に説得することの意味とそれに必要なこと―
・異文化間コミュニケーションの考え方 ―違いを理解し表現すること―

■ 講習

社会や経済のグローバル化の急速な進展に伴い、単に受信した外国語を理解することにとどまらず、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」の育成がより重要となっている。ただそれには、やみくもに発信するのではなく、それぞれの言語のコミュニケーションを行うためのルールを身に付けておく必要がある。

そうした能力の開発のため、ディベートというコミュニケーション活動が昨今よく取り上げられている。本講座でも一つのテーマとして、「ディベートの考え方―論理的に説得することの意味とそれに必要なこと―」を取り上げ、「ディベートとは何か」という基本概念の理解をもとに「ディベートは面白い」という興味関心の喚起を促す指導を考える。

コミュニケーション・ルールのもう一つのテーマとして、「異文化間コミュニケーションの考え方―違いを理解し表現すること―」を取り上げる。英語でのコミュニケーションには異文化の視点が不可欠である。この講習では、異文化間コミュニケーションの諸要素（高・低コンテクスト、active listening, assertive communication 等々）を取り入れた議論・会話活動・メディア理解に取り組む。



■「ディベートの考え方」　　中井 弘一

これから必要となる力 … ディベート力が必要

（1）将来を構想する力：知識の習得ではなく知識を使いこなせる力
- 背景がどうなっているのか（過去の流れをつかむ）
- 必要とされる知識は何か（必要とする知識を見通し用意する）
- これからどうなるのか（未来・将来を予測する）

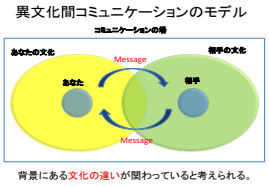
（2）コミュニケーション力：他の人と豊かに意見を交わす力
- 国際社会→英語などの語学力
- 積極性（様々な手段を講じて伝えようとする「意志」）
- 伝えたい内容（深みとひろがりのある内容を話す素養・知識）

（3）試練を乗り越える力：人生の様々な局面の危機を乗り越える力
- 困難を乗り越えてこそ、人間は大きくなれる
- 状況を整理し、何をクリアーすべきか考える
- 悩みを克服する知恵・サポート（読書・友人など）

ディベート思考を取り入れた授業の工夫

ディベートの試合形式に精通することよりも、主張に必要な「データ」「根拠」を用いていかに論理的に表現するか、その思考回路（①問題意識 ②情報処理 ③論理的思考 ④ Quick Response）を構築する様々なタスク・活動を工夫し授業に取り入れることが望まれる。

■「異文化間コミュニケーションの考え方」　　東條 加寿子



1. 学習指導要領で示されている目標と内容
2. 異文化間コミュニケーションの考え方を取り入れた「違いを理解し表現する」視点
3. 異文化間コミュニケーションの考え方を取り入れた「違いを理解し表現する」技術　D.I.E　Active listening　Assertive communication
4. 異文化間コミュニケーションの考えを取り入れた「違いを理解し表現する」教材・授業を考える
   中学校・高等学校のテキスト、その他の素材の教材化

異文化間コミュニケーションにおける“違い”認識の段階

第1段階：違いの「存在」を認識する（違いが無意識レベルに、かつ双方に存在することを認識する）
第2段階：違いの「中身」を認識する（どんな違いなのかを知る）
第3段階：違いの原因を分析する（なぜそのような違いが生ずるのかを考える）
第 4 段階：違いを認めた上で、相手を正しく理解し、自分を正しく表現する方法が分かり、実践できる

■ 講習コメント

参加者（紙面の都合により 23 名のうち 11 名）のコメント

○ 最近の英語教育の一つのブームとして、英検などの合格者数や、TOEICBridge、G-Tech などの得点率をあげるための訓練法を競うものがあるように感じている。それが今までの訳読中心の、何年勉強しても役に立たない英語教育の進化形のように思われているところがある。しかし、英語教育を通じて私たちが伝えたいもの、育てたいものは何であろうか？その原点に立ち戻るヒントを示唆する素晴らしい講習の内容だと思う。そこを見失っては、ただのノウハウに陥ってしまうことをもう一度しっかり認識し、他の先生方にも伝えていきたい。どうもありがとうございました。

○ 英語によるコミュニケーション能力をつけることで、グローバルな人材を育てていくという昨今の「大阪の教育」の流れの中で、それを強制されるというよりはむしろ利用して自分の授業を活性化していきたいと思える示唆に富んだ内容でした。
　生徒の興味関心を引き出すには様々な知識や情報を得ていくことが私たち教員にとってはとても重要であり、今後はその skill が何よりも必要となってくると思います。
　ディベートの考え方を使ったり、異文化間コミュニケーションの視点を教材を使っていくときの切り口にしていこうと、今日は、とても勉強になりました。ありがとうございました。

○ 今まで自分の不勉強もあり、ディベートについてはほとんど無知に等しかったのですが、今回の講習で目からウロコが落ちる思いでした。特にディベートには英語の 4 技能を全て使わなければならないうえに、プレゼンテーション能力も求められる。極めて興味深く聞かせていただきました。ぜひ実施しようと思いますが、日常の教員としての制約、また英語を教えていく中でも他の英語の教員と共通にしなければならない部分もあり、克服しなければならない課題も多いです。様々な困難や局面を乗り越える力がディベートには必要だと講義に中にありました。勇気を出して頑張っていこうと思います。

○ 昨年の講習に参加された方の感想から、今回、申し込みをさせていただきましたが、中井先生のお話はとても楽しくディベートが苦手な自分だったのですが、その楽しさを知ること、物事において持つ自分の考えや意見の根拠がいかに大事であり、また相手とより深く通じ合える大切さを理解することができたと思います。

○ ディベートの考え方と異文化間コミュニケーションの考え方という斬新な切り口に興味を持ち、今回受講させていただきました。内容も

盛りだくさんで、いろいろ勉強させていただきました。夏季においても何か新しいテーマで講習会をやっていただければと思っています。今日は本当に有り難うございました。今後ともよろしくお願いします。

○ 全体として大変有意義であった。文科省の教科書を分析していく点、異文化の視点で授業を進める視点は、日頃なかなか実践していなかったことなので、改めてその重要性を思い出しました。この 4 月からは暇になるので、教材研究をしようと思います。今日のテストですがこのように振り返りがある方がありがたいと思いました。ディベートも 30 年以上も前に ESS で半年ほどしていたことを思い出しました。生徒は面接等で意見を求められても、「考えたことがない」というようなことが起きるので、英作文の形式でディベートを導入できればと思います。導入できるかどうかは別として有効な方法だと思います。ありがとうございました。

○【ディベート】一言で申しますと、非常に良かったです。その考え方を本格的に学んだのは初めてであり、これまで自分が持っていた表面的なイメージと違って、現代社会を生き抜くのに非常に重要なものを教えられると感じました。教えるための技術というよりも、私たち自身が生きていくために必要なものですね。

【異文化間コミュニケーション】生徒の心を揺さぶる時事英語をたくさん使っていきたいと思います。言い訳になるのですが、多くの授業を抱える中でじっくり生の英語に自分自身が触れて生徒用にアレンジする時間はなさそうに感じています。BBC,CNN などを使っていきたいと思います。イラク、沖縄のニュースの裏側、本当に深いですね、ありがとうございました。

○ ディベートというか、議論のやりとりを建設的に行うコツを知りたくて参加しました。基本的な考え方を教えていただきありがとうございました。異文化間コミュニケーションは、私自身興味があり、とても楽しく聞かせていただきました。私も教科書を探してみたいと思います。また、最後のメイア発言は私にとっても目を開かされるものでした。ありがとうございました。

○ 有意義な講習ありがとうございました。今回の二つの講座も前回同様、講師の先生方の人間性が感じられた内容であったことに、とても満足しています。「ディベートの考え方」についても「異文化間コミュニケーションの考え方」についても、そのどちらにおいても「英語」という教科を単に「知識」として教えるのではなく、その背後にある「人間」「文化」の理解を第一の目的として学ばせることが、英語科の教員の使命であることを再確認することができました。ディベート、異文化間コミュニケーションの両方において、その考え方については、私自身、これまでにもいろんな機会において学んできたことではあったのですが、今回の講習で、授業でどのように取り扱っていくのかということが具体的に分かりうれしかったです。新学期に授業をする事が待ち遠しくなりました。ありがとうございました。

○ 本講習受講前までの自分なりの勝手な解釈や知識の乏しさを痛感させられて、ただただ、反省するばかりでした。

更新制度には決して賛成できませんが、今回のような機会は大変有益なものだったと思います。願わくば、義務化ではなく、日常の校務が減り自ら研修に参加できる時間が作れるような環境を整備してもらえればと思います。今回のみの受講では、まだまだ足らずが多い私は今後も更に研修を必要とすることが分かりましたので、機会があればぜひとも中井先生の講義を受講したいと思いました。本日はお忙しい中本当にありがとうございました。

○ とても充実した一日ありがとうございました。ディベートがコミュニケーションのスキルアップに役立つと分かっていても、どのように導入していいのか分からずにおりましたが、具体的な例をたくさん挙げてくださることで、私にもできるという気持ちになれました。どうしても時間をかけて、運営をきちんとして…とやる前に準備が大変だという思いが重くのしかかってきて一歩を踏み出すことができませんでしたが、授業のちょっとした時間を使って興味を持たせれば生徒の意見を引き出すことができるかもしれないという自信につながりました。

時事英語も英字新聞を使ったことがありましたが、難しくてなかなか生徒の共感を得られませんでした。ニュースの背景をよく調べ、物語として生徒を引き込んでいく教師の力量が大事になってくると思いました。本日はとても楽しかったです。ありがとうございました。

大阪女学院大学 教職課程機関誌　発行
『OJC 教職活動報告・研究』

2010 年度教職課程を開設したばかりの大阪女学院大学は、毎年度、教職課程機関誌を発行し、当該年度の活動報告を中心に、教職や英語教育に関する研究を併せて編集することとしました。本学の教職課程の発展充実を図るとともに、学校現場で直接教育実践を行っている教員の皆さんと共に実践研究を進め、明日からの教育を考える教育機関誌としての情報提供の役割を担うことが発行の趣旨です。

産声を上げたばかりの本学教職課程は緒に就いたばかりで、まだまだ行き届かないこともあり、本機関誌も改善の余地を多々残していますが、まずは最初の一歩として着実な歩みを示したいと願っています。皆様の温かいご支援・ご協力を今後ともよろしくお願いします。

http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc/newsletter/bulletin

大阪女学院大学教職課程機関誌
「OJC 教職活動報告・研究」投稿要領

1. 本誌が受け付ける「研究部門」投稿種別、および原稿量は以下のとおりとし、注もその中に含めるものとする。

① 研究論文	2 万字以内	（論文掲載開始年度は未定）
② 研究ノート（自由論考）	同上	
③ 実践記録・報告	同上	
④ 書評	4 千字程度	
⑤ 図書紹介	2 千字程度	
⑥ 英語教育動向	8 千字以内	
⑦ 特別企画	教員養成センター編集委員会で定める。	

2. 本誌「研究部門」に投稿できる者は、原則として本学の教職課程専任教員と教職科目担当教員・非常勤教員、及び OJC 教職ネット登録の中学校・高等学校英語科教員とする。実践記録・報告に関しては、本学の学生または本学を卒業した現職教員・教育関係者も投稿可とする。また、OJC 教員養成センター編集委員会が依頼したものはこの限りではない。
3. 掲載の内容について
   ① 原則として教職及び英語教育・教科英語に関するものとする。
   ② 未発表のものに限る。但し、講演やシンポジウムなどの特別企画についてはこの限りではない。
   ③ 図版や統計資料を掲載することは可能である。但し、原稿量は 1 で示された字数に見合うものとする。
4. 投稿方法と時期
   ① 投稿原稿は教員養成センターの事務局に届けるものとする。
   ② 投稿原稿は、原則としてワープロ原稿とし、メモリースティック等を付けること。レイアウトは自由にしてよい。
   ③ 投稿原稿には邦文（英文のタイトル）と要旨（200 字以内）を添付すること。
   ④ 投稿原稿の提出時期は当該年度の 12 月末とする。それを過ぎた原稿は次年度に回す。ただし、依頼原稿は 1 月末とする。
5. 機関誌の発行時期は原則として年度末とする。

授業の玉手箱

学習意欲を高めるストラテジー

中井　弘一

学習意欲とは、「自らすすんで学習しようとする気持ち」である。この意欲がなければ学習効果は期待できない。「馬を水辺に連れて行っても水を飲ませることはできない」という格言がある。馬の気持ちと人間の気持ちが同じでないように、教師の期待する気持ちと生徒のやる気は同じではない。ただ、すべてのことにやる気を示すことはあり得ないし、すべてのことに全くやる気がないということもあり得ない。やる気はどの生徒も持っている、ゼロということはない。英語教師にとっては、"In language teaching, teachers can provide all the necessary circumstances and input, but learning only happen if learners are willing to contribute." であろう。

学習意欲を高めるための学習環境や教材提示のアイデア例をわずかであるが簡単に紹介する。

教室環境の工夫

・教室内に楽しい雰囲気を作る
　楽しい英文メッセージ学習ポスター、英語新聞をたくさん掲示して、英語教室の雰囲気を作る
・学習をサポートする資料掲示
　教材に関する楽しい資料を掲示する（生徒の制作を含む）
　教材に関してなるほどと思う知的な資料の掲示（図解などの工夫を取りいれて）
　先生からのワンポイント・アドバイスを掲示する
　教材に関わる英語クイズを作成し掲示する

教材を学習者に関連深いものに

・教材研究を徹底し、日常体験と教材背景との関連づけを工夫する
・多様な音声表現の導入：様々な音読を提示する（複数 ALT によるシチュエーション設定読みなど）
・音読活動を工夫する（音読はリスニング向上につながるように）
・学習の興味をひく楽しいタスクの工夫　：異文化との接触・若者文化・目新しい活動・空想を取り入れる活動・競争的な活動・挑戦的な内容を含む活動などを盛り込む
・自分の考えを述べる活動の工夫：生徒の活動を増やす

具体的な目標を持たせる

・学習到達目標を明確に具体的に設定し、達成感を持たせる
・授業で行う活動の意義を十分理解させる
・ほめることばを工夫する（good だけでなくなぜ、どこがいいのかをきちんと述べる）
・達成感を目に見える形で：頑張りシール・班対抗等の競争などを活用する

学習契約を交わす

・生徒の努力目標を書かせると同時に、その目標に対する先生の支援の約束や生徒の成果に対する評価を楽しい契約書として生徒個別に作成する。
・学習進度パスポートを作成し、課題達成ごとに国別の通過スタンプを押して、頑張ったことを褒めるコメントを添える。

家庭学習のストラテジーを定着させる

・基礎的な内容で分かりやすい復習ノートで学びの定着を図る
・授業後、更に突っ込んだ考えを促す課題を毎回提示する
・チャレンジングで楽しい課題を提示する
・様々な勉強の仕方をそのねらいとともに話す

書籍紹介

『異文化トレーニング　―ボーダレス社会を生きる―［改訂版］』
八代京子、町惠理子、小池浩子、吉田友子著（2009）三修社 3,045 円

「異文化理解」は中学・高校の英語教育の主要構成要素の一つで、外国の文化や外国の人々を紹介する形で教科書の中でも積極的に取り上げられている。実は、文化と言語の関係性は、人間の無意識レベルの深いところにまで及んでおり、文化を超えたコミュニケーションにおいては、まず違いが存在することを認識し、なぜそのような違いが生じるかを考えた上で、効果的な（通じあえる）コミュニケーションをとっていくことが必要である。その意味で、英語教育は、異文化コミュニケーションの深層に横たわる文化と言語の問題を取り扱う直近の現場であるといえる。

本書は、異文化コミュニケーションを専門分野とする著者らが、生活習慣や価値観の異なる状況下でお互いにわかり合うために必要な態度やスキルをわかりやすく解説している。また、本書には多数の異文化トレーニング問題が収録されており、それらの問題に取り組むことによって、私たちは、異文化に接する際に知らず知らずのうちに行使している自文化中心主義的な考え方やステレオタイプ的な見方に気づくとともに、柔軟な思考と態度を養うためには具体的にどのようなスキルが必要かを知ることができる。学習指導要領で指摘されている「共感的な理解によって相互の立場を尊重し合える態度を育てる」具体的方策の一つとして、異文化間コミュニケーションの観点は示唆に富むものであり、本書は、英語教育に携わる教師にコミュニケーションの本質に近づく道筋を示してくれる良書である。

なお、本書の筆者、八代らによる近著『日本語教師のための異文化理解とコミュニケーションスキル』（三修社、2010）は、文化軸を 180 度転回して、外国語としての日本語教育の観点から異文化コミュニケーションスキルを解説しており、併せて推奨したい。英語教師のいわば“影武者”向けの当書を読むと、英語教育でなすべきことがより一層明確になるから不思議である。

（東條　加寿子）

編集後記・第８回勉強会（案内）

3 月 11 日東日本大震災で被災された方々には心よりお見舞い申し上げたい。国難とも言えるこの事態に何かできることを考えていきたい。2 年目を迎える newsletter も現場の先生に元気を与えるものでありたい。（ひ）

第８回勉強会予定
平成 23 年5月 21 日（土）

東日本巨大地震発生から 3 日目、岩手県内で取り残された家屋の 3 階から 3 人のお年寄りの救出状況が映像で伝えられた。そのうちの一人のおじいさんが、テレビ局のマイクに、「チリ津波んときも体験してっから。大丈夫です。また再建しましょう」と笑顔で話した。このおじいさんの力強い不屈の気持ちこそ、教育の現場でも発揮すべきものであろう。

今回の勉強会では、中学校の岡先生に「元気が出る英語授業」についてお話していただき、残りの時間を中井がお話します。

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher-training Center
540-0004　大阪市中央区玉造２丁目 26 番 54 号
Tel: 06-6761- 9371　Fax: 06-6761-9373
Homepage: http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc
e-mail: ttc@wilmina.ac.jp